

測定室だより

No. 12

1991年7月22日

発行 放射能汚染食品測定室 代表 藤田 祐幸 ￥200-
事務局 横浜市港北区日吉4-1-1 慶応義塾大学物理学教室 藤田 祐幸 気付
電話 045-562-2279 (FAX兼用) 振替 東京9-118321 放射能汚染食品測定室

5年目のチェルノブイリを訪ねて Mさんへの手紙

藤田 祐幸

Mさん、お元気ですか。

私と豊崎さんは、5月4日に無事に帰国致しました。昨年の5月以来、この一年で三度目の訪ソになります。今回の旅は、チェルノブイリ事故五周年の記念日を現地で開催したいという気持ちで計画したもので、ごく私的な旅でした。4月23日に東京を発ち、同日夕方モスクワに着きました。驚いたことにモスクワは時ならぬ雪が降っておりました。

その夜の夜行列車でミンスクに向かいました。ミンスクでは、昨年世話になった方々と再会し、その後の情勢の変化について意見を交換しました。私たちが持参した「チェルノブイリ事故による放射能汚染地図」は大好評で、この地図の老家である水文気象委員会のマトビエンコ氏は『我々がいくらこのような詳細な地図を作っても誰も信用する者がいない。日本でもこのように評価されているという証明になる』と、早速オリジナルの地図に

並べて壁に貼ってくれました。ここで、この4月に完成したばかりの新しい地図（白ロシア共和国のみ）を貰いました。いくつかのホットスポットがつながって、汚染地域はさらに広がっています。また、各地区ごとの詳細な地図も作成されており、順次現地に配布される予定であるということでした。しかし、その後現地を訪れて、このような情報は全く伝えられていないという現実と直面することになりました。

25日はミンスク郊外のソフォーズを訪ねました。ここには汚染地域からの避難民が住んでいました。数十人の避難民は立派な住宅を与えられ、元気に働いておりました。しかし、同行したエコロジー同盟のサビツキー氏によれば、このソフォーズの指導者は汚染地域に出かけて、若者や特別な技術を持っている者だけを選別して連れてきている、その結果、いよいよ年寄りや能力のないものは汚染地域

に捨て去られているのだ、と指摘しました。

26日、五周年の当日、夕方からミンスクの中央にある革命広場に人が集まり始め、犠牲者の追悼集会が開かれ、4時過ぎにデモが発しました。道路の真ん中を、沈黙のデモが粛々と進みました。三時間ほどで郊外の公園に着きました。そこにはチェルノブイリ事故犠牲者の慰霊碑が建てられており、その除幕式が行われました。その式典には、ロシア正教、ユダヤ教、イスラム教、カソリック教のそれぞれの白ロシアの最高指導者が順に立って祈りを捧げました。激しい民族抗争や宗教抗争の続くこのソ連で、こんなことが実現することは極めて稀なことだそうです。

翌朝、私たちは車でゴメリに向かいました。ここを拠点に汚染地域の調査をします。28日にはなつかしいブラーギンに行きました。チェルネフの埋葬された村の給水塔には、思った通りコウノトリが巣作りをしていました。このすぐ裏にある墓地で、放射線レベルは今回の旅での最高値の0.5ミリレントゲン/時を観測しました。平方キロあたり100キュリーという驚くべき値です。この墓地には新しい花も捧げられており、いまだに墓参に来る人の絶えないことを示しています。

サマショーロの人達の住む村にも行きました。避難先での苦しい生活に耐えかねて故郷の村に舞い戻ってきた人々です。彼らは自由に畑を耕し、家畜を飼って暮らしていました。しかし、その心の中には、不満と不安がキューキューに詰まっています。すべての情報から隔離され、完全に見捨てられた人々であることが分かります。ミンスク郊外のソフォー

ズでの人買いのような状況と見事に重なってきます。汚染地域に捨てられた人々です。棄民が始まりました。

夜はブラーギンの市長と会食しました。昨年と比べると、彼は憔悴しているようでした。IAEAやICRPなど、国際的原発推進シンジケートによって、被害は過小評価される傾向があり、汚染地域に住む住民を避難させることはいよいよ困難になっているようです。

翌日は、ホイニキに行きました。ここでも公式な機関との会見は一切行わず、ただ民衆の声に耳を傾けた一日でした。この地域の南部には広大な鉄条網で囲まれた地域があり、ここに『ポリェシエ国立放射線生態学保護区』という看板が立っていて、立ち入りやキノコ類の採取などの禁止事項が示されておりました。広大な沃野が捨て去られました。

30日は、国境をこえてロシア連邦共和国に入りました。国境の森で放射能を測りました。40キュリー地帯です。放射能は確かに国境を越えておりました。しかし、何事もなかったかのごとく平穏な農村風景が続きます。ノボズィプロコフという町に出て、そこから郊外の農場研究所に行き、その所長以下代表的な指導者と会うことができました。彼らも私たちの持参した地図を見て、国境を越えて広がる汚染の全貌を初めて知ったようでした。しかし、ここは官僚体制むき出しの不愉快な研究所でした。

夕方にはゴメリに戻り、ゴメリの農業研究所に行きました。ここは連邦政府の管轄で、これから建設するという研究所の仮事務所のような雰囲気でした。驚いたことに、ゴメリ

にもうひとつある共和国の同じような研究所とは全く接触もないのです。ノボズィブコフでも、また、ミンスクでも感じたことなのですが、この巨大な悲劇を前にしながら、ソ連のそれぞれの機関は堅固なセクショナリズムを貫き通しており、しかも相互に根深い不信感があり、結果として、汚染地域の農民が棄民となる現実があります。

昨年夏に比べると、政治状況の悪化も手伝って、状況は暗く重く、解決の方向が見えません。チェルノブイリが引き起こした経済と政治の破綻が、結果としてチェルノブイリ

被害者の見殺しを引き起こすという悲劇の拡大再生産です。

またもや重い課題を抱えて、バブル経済の繁栄に酔いしれる日本に舞い戻ってきました。同じ地球の上でありながら、どうしてこれほどまでに違うのでしょうか。

IABAの報告書が公表されました。予想されたように、被害は何も起こってはいないというものでした。いよいよ、汚染地域の農民を救い出すことが困難になりました。

またいつか、あの農民たちを訪ねる旅に出かけることになるでしょう。

放射能測定器を1台でも多く、早く汚染地域へ 放射能測定システム、2セットをソ連におくった自治労の派遣団に参加して

大東 断

チェルノブイリに放射能測定器をおくる会がソ連におくろうと考えているのと同じ放射能測定システムが、おくる会に先行する形で、自治労によってソ連におくられた。6月19～25日、自治労派遣団7名（自治労代表4名、私と測定器製作メーカーであるタウ技研の2名）が、この放射能測定システム2セットを携えて訪ソ、チェルノブイリ救援の一環として交流先の全ソ地方産業公務労働組合におくったもの。

自治労は都市交・全水道とともに昨年からチェルノブイリ救援のカンパに取り組んでいたが、交流先の労働組合の”放射能測定器が緊急に必要”という希望に沿って救援の中に

放射能測定器を取り入れ、救援運動としては初めて、まとまった放射能測定システムをチェルノブイリ事故被害地域へおくるという援助が実現した。

測定システムの1セットの構成は、内部被曝を減らすために食品の放射能汚染を検査できる測定装置1台と外部被曝に直接かかわる生活環境の放射能汚染を検査するための携帯用測定器10台。そして、測定器の付属機器の他に、これらを有効に活用するためのロシア語説明書や日本とのデータ交換のためのファックス、ビデオによる説明用機器などからなる。今回は2セット、木箱に梱包して10箱と大変な量になったが、なんとか派遣団の

乗った飛行機に貨物として積み込み、無事届けることができた。

汚染地域での測定

ソ連滞在は、受け入れ先労働組合が組んだ日程にあわせてのいそがしい行程。19日にソ連着、翌20日はモスクワで放射能測定器のセミナーを開催、夜行列車で測定器1セットを携えゴメリへ。21日、ゴメリでセミナー開催。22日、ゴメリ市に隣接する高汚染地域ベトカでの測定、夕方の飛行機便で再びモスクワへ。23日、市内見学。24、表敬訪問、お別れ会。25日にモスクワを立ち、26日に東京にもどった。

ゴメリ市での2日め、ゴメリ市からおよそ

20キロはなれた高汚染地帯の中にある、すでに閉鎖されているというサナトリウムに案内された。車で出発。途中、ベトカ市内の博物館の見学が入り、サナトリウムでの見学、測定が終わると、モスクワへ帰る飛行機の間におわれて車をふっとぼして帰るといふあわただしさであった。私たち日本からのメンバーだけでなくソ連の組合の人も携帯用の放射能測定器を携えて行ったものの、十分な測定作業を行えなかった。測定できたのは広大な汚染地域のなかのほんの数ポイントにすぎないが、3カ所の測定結果を図に示した。

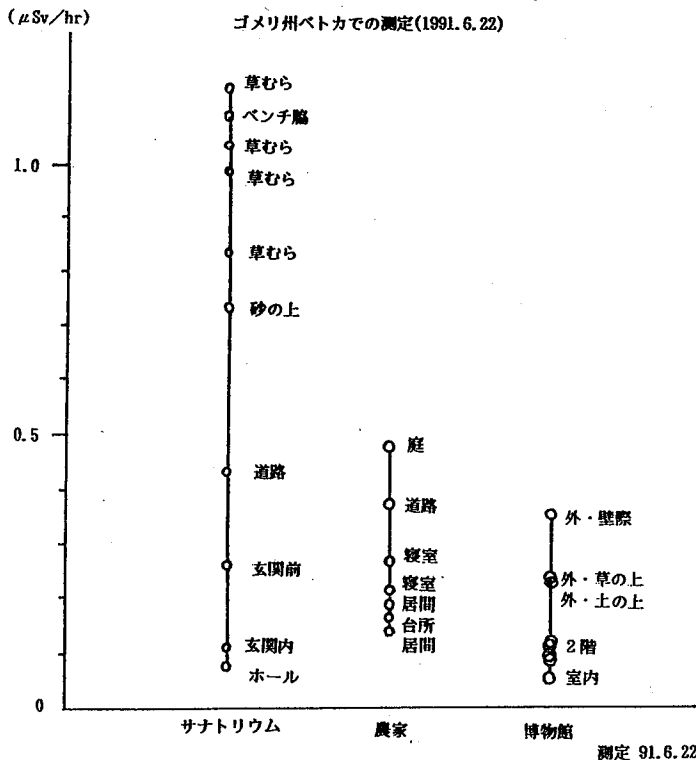
サナトリウムはベトカ市街から車で15分ほど離れた松林の中にあった。鉄筋コンクリート2〜3階建て、白壁のこざっぱりとした

建物。そばにはソジュ川が流れ、もし事故がなければ保養者が川辺で存分に日光浴を楽しんでいたであろう絶好の保養施設。いまでも、宴会や結婚式には使われているという話であった。図に、示すように建物内の玄関やホールは $0.12 \sim 0.06 \mu\text{Sv/hr}$ と以外に低かったが建物を一歩でると測定値は高く、場所によって十数倍位の幅で変動した。

サナトリウムからの帰り道、道路両側の林も切れて民家がならびはじめるところで1軒の農家に立ち寄り、測定の許しを得た。車を降

生活空間の放射線量率

ゴメリ州ベトカでの測定(1991.6.22)



りた道路脇の測定値も高いが、くぐり戸をは
いった庭ではさらに高かった。居室に案内さ
れたが、ドアをあけた最初の部屋にベッドが
置かれていて寝室として使われている。その
寝室での測定値が家屋内では一番高く、およ
そ毎時0.27 μ Sv。隣の居間では0.15、次のへ
やで0.18、いちばん奥がまた寝室になってい
て0.21とやや高い。台所では0.16であった。
同行したソ連の人たちにせかされて、納屋な
ど含めて、もう少し念入りに測定することが
できなかったのが残念だった。

公表されているデータでは、ベトカ市周辺
は平方キロあたり15~40キュリー、あるいは
40キュリー以上という汚染地域。イワンとミ
ーシャの会の翻訳したパンフレットによると、
共和国内の人々が住んでいる場所でのガンマ放
射線レベル一覧（ソビエツカヤ・ベルロシア
紙掲載）で、ベトカは0.124~0.179mR/hr

（1990年7月17~23日）だという。同一市内
の異なる地区で測定されたとの但し書きはあ
るが、それ以上詳しくは測定場所や値が示さ
れている訳ではない。

実際に人が生活する場での放射線レベルは
場所によってかなりの高低があるということ
が、このほんの1例の測定結果からもわかる。
事故から5年以上たったいままでさえ汚染地域
に暮らす人たちが、自分達の暮らし、働く場
の汚染状況を詳しくつかむことができていな
い。一方で、IAEAが汚染と被曝はたいし
たことはないという報告書を出し、汚染と被
曝の現実を、再び消し去ろうとしている。住
民自身がしっかりしたデータをつかむことが
できるように、できるだけ早く1台でも多く
の放射能測定システムを被曝地域の住民へ、
との思いを強くする旅であった。

放射能の被曝を少しでも減らすために

チェルノブイリに放射能測定器をおくる

募金活動の呼びかけ

チェルノブイリに放射能測定器をおくる会

1986年のソ連チェルノブイリ原発事故
の放射能汚染地域と、セミパラチンスク核実
験場の放射能汚染地域では何百万人もの人々
が逃げることもままならず、放射能被曝の危
険性についての十分な情報も知らされないま
まに生活しています。

放射能は子供や病人などの社会的な弱者の

生存を真っ先に脅かします。そして、母親達
の身体をとおして何世代にもわたって人々の
生命を脅かします。世界有数の原発大国、人
類史上唯一の原爆被爆国である日本に住む私
たちにとって、これらの汚染地域に住む人々
の苦しみは決して他人ごとではありません。

私たちは、このような事態に心を痛める日

本の市民が力を合わせ、汚染地域の住民のもとに、住民自らが放射能の実態を把握し、被曝を少しでも避けるための自衛手段となりうる放射能測定器・測定装置システムをおくり届けたいと思います。それをきっかけに、被曝者との息の長い交流・連帯の活動を起こすことを提案いたします。一人でも多くの皆さんがこの計画の主旨に賛同され、積極的に参加されるよう訴えます。

広大な汚染地域・長期にわたる被害

チェルノブイリの放射能が飛散したウクライナ、白ロシア、ロシアの三共和国と、カザフ共和国セミパラチンスク核実験場周辺の広大な農地、森林、水源、町や村が放射能に汚染されています。被害は一時的なものにとどまりません。数十年、数世代にわたって人々を脅かし続けます。

ナロジチ地区会議の執行委員会議長ブチコ氏は、「今年（1989年）中に、子供のいる338世帯を移住させるという約束だったが、地区の計画は4年間延期された。9月になり、1平方キロメートルあたり170キュリーの村の幼稚園、学校を再開せざるをえなくなった。地区の全体を汚染されていない食品に切り替えるという問題を緊急に解決する必要がある。1500人の子供たちが汚染食品を食べているのである。わかっただきたい。私はもういい年だからどうでも良いとしても、子供たちを見ているのが辛くて…」と語っています。

もうこの地域では放射能汚染のためにベストな環境はなくなりました。しかし、今、ベターな努力をしなければさらに継続したひど

い被曝を受けることになるのです。ベストな環境を願う私たち市民だからこそ、ベターな生活への協力がどんなに大切なことか理解されたいと思います。

子供、母親、住民一般の健康と生命を守り、子孫の生命を守るために

汚染のひどい地域には、そこで暮らし続けなければならない多くの子供、母親、農民、住民がいます。この人々は、まるで、健康障害が出てくるのを待つような生活が強いられるのです。なかでも、放射能被害にもっとも感受性の高い子供と母親、将来の生命をあずかる女性たちの健康と生命が心配されます。

今、何が必要か

医療品や医療活動と並んで放射能測定器も緊急に必要です。これ以上、被害地の住民、農民、市民、労働者の被曝を増大させないために、放射能測定による地域の被曝防護体制をつくることが非常に大切です。それを実現するためには1台でも多くの測定器が必要です。現地の住民、市民、自治体の職員の手による食品、農産物や生活のあらゆる場所の詳細な調査には測定器や検査技術が欠かすことができません。

移住のできない住民に測定器を

チェルノブイリの汚染地域から逃れることのできない住民が被曝を受け続けるのは致し方ないのでしょうか。いや、そうではありません。居住地域の農地や森林、牧草地や河川・湖とそこからとれるミルクをはじめとする

乳製品、穀物、野菜、肉などの生活に欠かせない食べ物を測定、検査することによって、被曝を少しでも減らすことは可能です。ところが、被害地では測定器や装置が圧倒的に不足しています。そのための検査体制もないのが現状です。住民が自ら環境と食品の放射能を測定し、被害を少しでも減らすことができるように、日本の市民が協力しようではありませんか。

過去の愚を繰り返さないために

過去の広島、長崎、ビキニ、米ソ核実験場では放射能汚染の調査軽視やデータをすぐに公開しなかったことが被害をさらに拡大しました。被害が拡大していくことを防ぐために調査とデータの公表は大切なことです。核被害での放射能調査の軽視やデータ非公開の愚をチェルノブイリで繰り返してはならないと思います。

1986年日本の各地がチェルノブイリの放射能で汚染されたことを思い出しましょう。輸入されてくる食品が汚染されたことを知って子供達の健康を心配して行動したことを忘れず、チェルノブイリで今も日に日に被曝を余儀なくされている人々のために協力しましょう。その志は私たち自身の健康を守ることに繋がっているのです。

わたしたちの協力で

日本の市民が力を出し合って、測定器・測定装置システムを2カ所でも3カ所でもよいから被害地の住民に届けようでは有りません

か。その行動は被害の規模からすれば微々たるものですが、被害地の住民への具体的な励ましとなるはずです。また、日本と世界のより多くの人々にも、同じような支援行動を促す契機となるはずです。すべての汚染地域に検査体制が確立され、被曝の被害が少しでも軽減されることを願って、私たちはこの計画の実現に向けて動き始めます。より多くの皆さんが計画に参加されるようお願いいたします。

「この運動に取り組んだ私たちの思いを一言で述べるとすれば、それは”チェルノブイリの悲劇は私たちの問題だ”ということです。この悲劇の真実をくまなく確かめること、それがこの犠牲者の苦しみを少しでも救い、二度とこの悲劇を繰り返さないための第一歩だと確信しています。ソ連におくられる測定器がこうした人類共通の願いと高い人間的な目的に役立つことを願い、この運動にさらに多くの人々のお力がよせられることを希望してやみません。」(4.26おくる会の集会での松岡信夫さんのメッセージより)

事務局 〒101東京都千代田区西神田2-7-14西神田ビル4F たんぼぼ舎内 チェルノブイリに放射能測定器をおくる会

TEL 03-3238-9035 FAX 03-3238-0797

募金振込先 郵便振替 東京0-5 5 2 6 4 4

チェルノブイリに放射能測定器をおくる会
代表、松岡信夫、富山洋子、小泉好延(補)

趣旨に賛同の方はどなたでも参加できます。事務局に連絡ください。当測定室も呼びかけ団体に参加しています。

放射能測定結果

1990年11月 ~ 1991年3月

	測定 年月	品名	生産地	放射能合計 (Bq/kg)
乳製品	90.12	粉ミルク	ソ連	検出せず
	91. 3	粉ミルク (再測定)	ポーランド	162
	その他、牛乳 (日本) 2検体、練乳缶詰 (不明)、マーガリン (不明) いずれも検出せず			
小麦粉・米	90.12	スパゲッティ	イタリア	5以下
		玄米 (日本) 3検体、ぬか、		いずれも検出せず
きのこ	91. 1	なめこ	日本	10
	91. 1	ならたけ塩漬	日本	5以下
	その他、なめこ、えのき茸茶漬、山菜味付煮、いずれも国産、検出せず			
魚・肉類	91. 2	肉缶詰	ソ連	14
	その他、コンビーフ (日本)、コンビーフ (不明)、魚缶詰 (日本) いずれも検出せず			
調味料	91. 2	和肉ソース	不明	5以下
	その他、産国不明の中濃ソース、ウースターソース、マヨネーズ、調味料 (山菜味付)、および国産の砂糖、真塩、食卓塩、いずれも検出せず			
香辛料	90.11	月桂樹の葉	アメリカ	検出せず
	その他、産国不明の胡椒、カレー粉、いずれも検出せず			
茶・飲料	90.11	紅茶	スリランカ	検出せず
	90.11	紅茶	インド	検出せず
	その他、産国不明のコーヒ 2検体、はこ茶、いずれも検出せず			
その他	90.12	ヘーゼルナッツ	トルコ	37
	その他、なたね油 (カナダ)、ごま (不明)、丸大豆 (不明)、ミルクチョコレート (日本)、茎わかめ (日本)、笹かまぼこ (不明) いずれも検出せず			
飼料	90.11	飼料用脱脂粉乳	日本	14
	90.12	牛用代用乳	不明	5以下
	91. 3	飼料用脱脂粉乳	日本	7
	91. 3	飼料用脱脂粉乳	日本	26
	91. 2	ピート	不明	5以下